

クラシック音楽講座

第11講 もうひとつの音楽史 ―オペラ・娯楽音楽の作曲家たち―

ヴェルディ プッチーニ ビゼー J.シュトラウスほか

講師：佐藤卓史

2024年8月25日（日） 小手指公民館分館

ドイツ語文化圏・器楽中心の音楽史では見過ごされがちな「オペラ」。
実は西洋音楽の“花形”であり、多くの音楽家たちがオペラ作家としての成功を夢見ていた。
「娯楽音楽」も含めて、大衆の心に寄り添った作曲家たちの歩みをみていく。

◎オペラの時代と作曲家たち

【オペラとは】

- ・概要：**音楽劇**の一種、ただし音楽の比重が大きい
- ・編成：舞台上に**歌手**（演技を兼ねる）、舞台下の**ピット**内に**オーケストラ**の「声楽+器楽」
- ・言語：**イタリア語**が標準 フランスではフランス語 後に各国語に広がる
- ・所要時間：**2~4時間**程度 ※現代の映画と似た規模のエンターテインメント
- ・上演施設：専用の劇場＝**歌劇場**（Opera）

【オペラのはじまり】

1600年頃、イタリア・**フィレンツェ**の文化人サークル「**カメラータ**」のメンバーが「**古代ギリシャ演劇**の復興」を志す。宗教音楽劇の様式にギリシャ神話の物語を組み合わせ「オペラ」誕生。**バロック音楽**の嚆矢とされる。

■**ヤコポ・ペーリ**（1561.8.20. ローマ～1633.8.12. フィレンツェ） 詩人リヌッチーニとの共同作業で「**ダフネ**」を作曲（1598頃、現存せず）。次作「**エウリディーチェ**」（1600）は現存する世界最古のオペラ。

■**ジュリオ・カッチーニ**（1545/1551? ローマ?～1618.12.10. フィレンツェ） 作曲家、声楽家、声楽教師として活躍。競争心が激しく、ペーリと同じ台本による「**エウリディーチェ**」（1602）をいち早く出版、また**モノディ様式**を明文化。2人の娘も作曲家になった。ちなみに有名な「**カッチーニのアヴェ・マリア**」はカッチーニの真作ではなく、20世紀ソ連の作曲家ウラディーミル・ヴァヴィロフの作品（偽作）とみられる。

《キーワード》**モノディ** ルネサンスの静的な旋律法・多声音楽と対照的な、言葉の自然な抑揚に従う新たな独唱の様式。歌詞の聴き取りやすさを優先し、音楽は自由に伸縮する。後にレチタティーヴォに発展した。

【バロック～古典派のオペラ作曲家たち】

■**クラウディオ・モンテヴェルディ**（1567.5.15.? クレモナ～1643.11.29. ヴェネツィア）

マントヴァ公に仕え多数の**マドリガーレ**（世俗合唱曲）を発表。作曲規則からの逸脱に対する批判に忖えて、規則に従う「**第1作法**」と逸脱を辞さない「**第2作法**」の分化を提案、各作法を音楽的要請に基づいて採用すると宣言。ルネサンス期にはなかった劇的で破格の表現を開拓し、バロック音楽の方向性を決定づけた。「**オルフェオ**」（1607）は現在も上演される最古のオペラ。ヴェネツィアに移り多くのオペラを手がけたが、現存するのは前述作と「**ウリッセの帰還**」（1641）「**ポッペアの戴冠**」（1642）のみ。

■**ジャン＝バティスト・リュリ**（1632.11.28. フィレンツェ～1687.3.22. パリ）

イタリア出身だが10代で渡仏、ルイ14世の宮廷に仕える。モリエールと組んで多数の「**コメディ＝バレ**」（舞踏喜劇）を発表後オペラに進出。フランス独自の様式による「**音楽悲劇**」を提唱、**舞踏**を採り入れたフランス・オペラのスタイルを創始。主なオペラに「**イシス**」（1677）「**プシシェ**」（1678）「**アルミード**」（1686）。

■**ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル**（1685.2.23. ハレ～1759.4.14. ロンドン）

大バッハと並ぶ後期バロックの巨匠。ハノーファー宮廷楽長時代に渡英し無断で定住。パーセルの没後低調だったイギリスの音楽界を牽引、多数のオペラに携わるが興行トラブル等で消耗し撤退。オラトリオに活躍の場を求めた。「リナルド」(1711)「アルチーナ」(1735)「セルセ(クセルクセス)」(1738)などのオペラが知られ、朗々としたメロディーからアリアが抜粋で愛唱されることも多い。

■ヨハン・クリストフ・ヴィリバルト・グルック (1714.7.2. エラスバッハ～1787.11.15. ウィーン)

ウィーンで成功を収めパリに進出。旧弊に固まりがちなオペラの世界に新風を吹き込む「オペラ改革」を断行、不自然さや誇張を取り除いた清新で格調高い表現を指向したが、伝統的なイタリア・オペラを好む保守層と激しく対立。「グルック=ピッチェニ論争」と呼ばれる一大闘争に発展した。主なオペラに「オルフェオとエウリディーチェ」(1762)「アルチェステ」(1767)「オーリードのイフィジェニー」(1774)「アルミード」(1777)。

■ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756.1.27. ザルツブルク～1791.12.5. ウィーン)

幼少期から各地でオペラに関わり、制作の実務を学ぶ。ウィーン進出後、その経験を生かし「後宮からの誘拐」(1782)「フィガロの結婚」(1782)「ドン・ジョヴァンニ」(1787)「コジ・ファン・トゥッテ」(1790)「魔笛」(1791)など多くのオペラを発表。他の追随を許さない圧倒的な完成度で古典派オペラの頂点を築いたが、大衆の人気は「フィガロ」を頂点として下降してしまった。

《キーワード》ナンバーオペラ(番号オペラ) 作品内のアリアや重唱等の重要な楽曲に、通し番号が振られたオペラ。本来ラテン語の opera とは opus (作品) の複数形で、独立した複数の楽曲が集まった「作品集」を意味する言葉だった。次第に各曲の独立性が弱まり、19世紀以降は通作形式への指向が強まる。

レチタティーヴォ 上述の通し番号のついた楽曲の曲間を繋ぐ、登場人物の独白や会話、状況説明などが行われる歌唱部分(和訳は「叙唱」「朗唱」)。いわゆる「セリフ」に旋律がついたもので、チェンバロ(レチタティーヴォ・セッコ)やオーケストラ(レチタティーヴォ・アッコムパニヤート)の断片的な伴奏が支える。レチタティーヴォではなくセリフを使用する場合は正式なオペラとは認められない(オペレッタ、ジグシュピールなど)。

オペラ・ブッフア 神話や歴史上の人物に題材を採った英雄的・悲劇的な内容の正統派オペラに対して新しく登場した、当時の一般市民を主人公とした滑稽な喜劇オペラ。多くは2幕もので軽量級だが、後にシリアスな内容のブッフアも登場する。対して従来のオペラはオペラ・セリア(正歌劇)と呼ばれるようになった。

【19世紀のイタリア・オペラ】

《キーワード》ベルカント 原義は「美しい歌」。イタリアの伝統的な歌唱法で、柔軟かつ均一な声質、華やかな装飾を伴う。その実態は歴史と共に変遷していったが、「歌」はイタリア音楽の中核を成す重要な要素である。

■ジョアキーノ・ロッシーニ (1792.2.29. ペーザロ～1868.11.13. パリ)

20代からヒット作を連発、ウィーンやパリを席卷。「ナポレオンは死んだが、別の男が現れた」(スタンダール)といわれたように人気ぶりは凄まじく、多くの作曲家たちの羨望的となった。年に数作という驚異的なペースで「セヴィリアの理髪師」「泥棒かささぎ」「タンクレディ」等のオペラ・ブッフアを手がけた後、大作グランド・オペラ「ウィリアム・テル」を最後に37歳で引退。後半生は料理研究に没頭した。現在では全曲の上演が行われることは比較的少なく、軽快で演奏効果の高い序曲だけが単独で取り上げられることが多い。

■ガエターノ・ドニゼッティ (1797.11.29. ベルガモ～1848.4.8. 同地)

抒情的でドラマティックな声の扱いに長ける。コロラトゥーラの超絶技巧の見せ場「狂乱の場」で有名な「ランメルモールのルチア」をはじめ、「アンナ・ボレーナ」「愛の妙薬」「ルクレツィア・ボルジア」など、セリア、ブッフアの別なく名作を残したマルチオペラ作家。

■ヴィンチェンツォ・ベッリーニ (1801.11.3. カターニア～1835.9.23. パリ)

楽才に恵まれた天才だったが34歳で早世。華麗で情緒豊かな旋律線はショパンらに大きな影響を与えた。代表作に「夢遊病の女」「ノルマ」「清教徒」など。

■ジュゼッペ・ヴェルディ (1813.10.10. ル・ロン・コーレ～1901.1.27. ミラノ)

「歌劇王」の異名をとる史上最大のオペラ作家。過度な技巧を排し、物語を重視した劇的表現を指向。力強い音楽運びと親しみやすいメロディーで圧倒的な支持を集め、イタリア統一運動の象徴ともなった。生前から多くの栄誉に浴したが、本人はオペラ界や政治の煩わしさを嫌い、郊外の農場に籠ることを好んだ。晩年には音楽家のための養老院を設立するなど慈善事業に尽力。

《主なオペラ》「**ナブッコ**」(1842)「エルナーニ」(1844)「**リゴレット**」(1851)「イル・トロヴァトーレ」(1853)「**椿姫**」(1853)「仮面舞踏会」(1859)「運命の力」(1862)「**マクベス**」(1865)「ドン・カルロス」(1867/84)「運命の力」(1862)「**アイダ**」(1871)「オテロ」(1887)「ファルススタッフ」(1893)

【19世紀のドイツ・オペラ】

《概要》ドイツやオーストリアの音楽界は伝統的にイタリアの影響が強く、ウィーン宮廷は同国人のモーツァルトを省みずサリエリらを楽長に招聘、「魔笛」のようなドイツ語の演目（**ジングシュピール**）は格下と見做されていた。ベートーヴェンやシューベルトのオペラへの挑戦も、興行主ドメニコ・バルバヤの仕掛けたロッシーニ旋風の前に潰えたが、ようやくヴェーバーがドイツ語で演じる「**国民オペラ**」の道を切り開く。

■カール・マリア・フォン・ヴェーバー (1786.11.18. オイティーン～1826.6.5. ロンドン)

モーツァルトの妻コンスタンツェの従弟。技巧派ピアニストとして活躍しながらプラハやドレスデンの歌劇場の監督を歴任、ドイツ語オペラの定着に挑戦。代表作「**魔弾の射手**」(1821)ではドイツ民話を題材にファンタジー的世界観を表現、大反響を呼び、ヴァーグナーなど後続の多くの作曲家に影響を与えた。ロンドンからの委嘱による英語オペラ「**オベロン**」の初演のため渡英、成功を収めるも結核が悪化し客死。

■リヒャルト・ヴァーグナー (1813. 5.22. ライツィヒ～1883. 2.13. ヴェネツィア)

ドイツ・オペラの革命家。旧来のナンバーオペラを否定し、**通作形式**の「**楽劇**」を創始。「ライトモチーフ」（示導動機）によって人物や状況・思念を音楽で描写する技法を採用。台本はすべて自ら執筆、神話や伝説に基づく壮大な叙事詩的世界を創造。上演には長時間を要し、劇的で過剰な表現を追求。多数の論文を発表、反対派と激論を交わす一方で熱烈な崇拜者（ワグネリアン）を生み、バイエルン国王ルートヴィヒ2世の庇護のもと専用劇場「**バイロイト祝祭歌劇場**」を建設。同劇場での「**バイロイト音楽祭**」では現在でもヴァーグナーのオペラだけが上演され、世界中から熱心なファンが巡礼に訪れる。

《主なオペラ》「**さまよえるオランダ人**」(1840-41)「**タンホイザー**」(1843-50)「**ローエングリン**」(1846-48)「**トリスタンとイゾルデ**」(1857-59)「**ニュルンベルクのマイスタージンガー**」(1862-67)「**ニーベルングの指環**」**四部作**（序夜「**ラインの黄金**」(1853-54)・第1日「**ヴァルキューレ**」(1854-56)・第2日「**ジークフリート**」(1856-71)・第3日「**神々の黄昏**」(1869-1874)）「**パルジファル**」(1877-82)

【19世紀のフランス・オペラ】

《キーワード》**グランド・オペラ** フランスではリュリ以来フランス語によるオペラが定着し、イタリア派との間で「ブフォン論争」「グルック＝ピッチェニ論争」などのバトルを繰り広げながら独自の様式を確立していった。イタリアのオペラ・セリアに相当する正統派オペラは「**グランド・オペラ**」と称され、**バレエ入りの5幕形式**にまで大規模化するが、やがて旧弊となり、「**ドラマ・リリック**」などの新様式に置き換わることになる。

オペラ＝コミック グランド・オペラの対概念で、イタリアのオペラ・ブッフアに相当する喜劇的オペラ。レチタティーヴォではなくセリフの語りをを用いる点が特徴。内容は次第に深刻なものが多くなり、よりコメディータ的な**オペレッタ**が分化した。

■ジャコモ・マイアベーア (1791.9.5. ベルリン～1864.5.2. パリ)

ドイツ出身のユダヤ人。イタリア、ドイツの様式を採り入れた華麗な**グランド・オペラ**の様式を確立。「**悪魔のロベール**」「**ユグノー教徒**」「**預言者**」「**アフリカの女**」などがヒットし、パリとベルリンを中心に大成功を収めた

が、シューマンやヴァーグナーらの批判を受け没後評価が急落。

■**シャルル・グノー** (1818.6.17. パリ～1893.10.18. サン＝クルー)

内面的な叙情性を湛えた**ドラム・リリク**の分野で活躍。ゲーテの戯曲をオペラ化した「**ファウスト**」をはじめ、声楽曲における旋律線の美しさには定評があり、「**アヴェ・マリア**」などの歌曲でも知られる。

■**ジョルジュ・ビゼー** (1838.10.25. パリ～1875.6.3. ブージヴァル)

将来を嘱望され 19 歳でローマ大賞を獲得。早くからオペラに注力し、「**真珠採り**」「**美しきパースの娘**」などを発表するが成功に恵まれなかった。「**カルメン**」初演の直後に 36 歳で死去、楽壇に衝撃を与えた。「**カルメン**」の原曲はオペラ＝コミックだが、死後友人の作曲家エルネスト・ギローの手でグランド・オペラに改作され、現在ではフランス・オペラの最高傑作と評されている。

【国民オペラの隆盛】

国民楽派の台頭とともに、それぞれの国の言語・題材によるオペラが多数書かれるようになる。

《**ロシア**》**グリンカ**「**ルスランとリュドミラ**」、**ムソルグスキー**「**ボリス・ゴドゥノフ**」、**ボロディン**「**イーゴリ公**」、**チャイコフスキー**「**エフゲニー・オネーギン**」「**スペードの女王**」

《**チェコ**》**スメタナ**「**売られた花嫁**」、**ドヴォルジャーク**「**ルサルカ**」、**ヤナーチェク**「**イェヌーフア**」「**利口な女狐の物語**」

《**ハンガリー**》**バルトーク**「**青ひげ公の城**」、**コダーイ**「**ハーリ・ヤーノシュ**」

《**スペイン**》**グラナドス**「**ゴイエスカス**」、**ファリャ**「**はかなき人生**」

《**アメリカ**》**ガーシュウィン**「**ポーギーとベス**」

【“オペラの時代”最後の巨匠たち】

《キーワード》**ヴェリズモ・オペラ** 19 世紀末、イタリアで興ったリアリズム文芸運動「**ヴェリズモ**」の影響を受け、貧困層の生活や残酷な暴力を生々しく描くオペラ。**ピエトロ・マスカーニ**(1863~1945)の「**カヴァレリア・ルスティカーナ**」(1890)、**ルッジェーロ・レオンカヴァッロ**(1857~1919)の「**道化師**」(1892)が代表作で、両者とも短い 1 幕のものであることから現在も同時に上演されることが多い。

■**ジャコモ・プッチーニ** (1858.12.2. ルッカ～1924.11.29. ブリュッセル)

イタリア・オペラ黄金期の最後の巨匠。ヴェリズモ・オペラの影響を受けたリアリスティック・残酷なストーリーのオペラで話題を集めた。息の長い印象的な旋律美と最新の音楽語法を融合した洗練された作風。

《主なオペラ》「**マノン・レスコー**」(1893)「**ラ・ボエーム**」(1896)「**トスカ**」(1900)「**蝶々夫人**」(1904)「**ジャンニ・スキッキ**」(1918)「**トゥーランドット**」(未完・1926 初演)

■**リヒャルト・シュトラウス** (1864.6.11. ミュンヘン～1949.9.8. ガルミッシュ＝パルテンキルヒェン)

交響詩でデビューした後、20 世紀に入りオペラを連発。ヴァーグナーの楽劇をさらに発展させ、前衛的な「**サロメ**」(1904-05)「**エレクトラ**」(1906-08)で物議を醸した後、モーツァルトへ回帰し「**ばらの騎士**」(1909-10)で大成功を収める。作風は次第に保守化し、「**ナクソス島のアリアドネ**」(1912/16)から第 2 次大戦中の「**カプリッチョ**」(1940-41)に至るまでドイツ・ロマン派の語法を守りながらオペラを次々に創作した。

R.シュトラウス以降、いわゆる“オペラ作曲家”は出現せず、現代でもオペラは作曲されているものの、もはやエンターテインメントとしての役割は担っていない。娯楽のメインジャンルは、もっと気軽に楽しめるミュージカルや映画へ移っていった。

◎ウィーンの娯楽音楽

【ウィンナ・ワルツのはじまり】

一説には…アルプス山麓で踊られていた3拍子の民俗舞曲(レントラー)を、ドナウ川を下ってきた楽師たち(リンツのヴァイオリン弾き)がウィーンに伝え、**ワルツ (Walzer > walzen 旋回する)**として発展したという。初期のワルツは16小節程度の短い小品で、これを繋げながら踊りの伴奏をした(例:**シューベルト**のワルツ、レントラー、ドイツ舞曲等)。踊りは過激で、当局から何度も禁止されたが人気は衰えなかった。1814年の**ウィーン会議**の名言「会議は踊る、されど進まず」はワルツ熱が支配者層にまで及んでいたことを物語っている。ウィーンの街中には豪華な舞踏会場 Ball が乱立した。

■ヨーゼフ・ランナー (1801.4.12. ウィーン~1843.4.14. 同地)

独学でヴァイオリンを学び、自らの楽団を結成。**ヴェーバー**の「舞踏への勧誘」をヒントに、ワルツをいくつも連結させた**ポプリ形式**の大ワルツを考案。「真夜中のワルツ」「愛の語らい」「シェーンブルンの人々」など洒落たタイトルを冠し、**ウィンナ・ワルツ**の様式を創始した。甘美で憂愁漂う旋律で高齢層の人気を集めたが早世。

■ヨハン・シュトラウス1世(父) (1804. 3.14. ウィーン~1849. 9.25. 同地)

ユダヤ孤児。21歳のときランナー楽団から独立、自らの楽団を結成し、古巣のランナーと「**ワルツ合戦**」を繰り広げた。浅黒くワイルドな容貌で「ムーア人」(黒人)の異名をとり、ダイナミックで活気溢れる作風で若年層に支持された。「**ワルツの父**」と称されるが、カドリューユやギャロップ、ポルカ等2拍子系の舞曲にも名曲が多い。1848年の革命に際し、体制側を翼賛する「**ラデツキー行進曲**」を作曲。猩紅熱に罹り愛人宅で急死。

【“ワルツ王”とシュトラウス・ファミリーの黄金期 1850-70】

■ヨハン・シュトラウス2世(子) (1825.10.25. ウィーン~1899.6.3. 同地)

同名の父の長男。父の反対に関わらず、母アンナの協力を得て密かに音楽教育を受け、ランナー没後に19歳でデビュー。家庭を顧みない父の強力なライバルとなる。父の死後楽団を引き継ぎ、ウィーン音楽界のスーパースターとして君臨、「**ワルツ王**」と称される。軽やかで魅力溢れる旋律美を誇り、多くの作曲家から賞賛と尊敬を集めた。後年は演奏会での鑑賞に耐える芸術性をもった「シンフォニック・ワルツ」を創始。1867年パリ万博で披露された代表作「**美しく青きドナウ**」の楽譜は100万部を超える大ヒットを記録し、レコード登場以前で最も人口に膾炙した音楽作品といわれている。

《主なワルツ》「朝の新聞」「**美しく青きドナウ**」「芸術家の生活」「**ウィーンの森の物語**」「**酒、女、歌**」「千夜一夜物語」「ウィーン気質」「**南国のぼら**」「**春の声**」「**皇帝円舞曲**」(以上「十大ワルツ」)

《主なポルカ》「アンネン・ポルカ」「トリッチ・トラッチ・ポルカ」「狩り」「雷鳴と電光」

■ヨーゼフ・シュトラウス (1827. 8.20. ウィーン~1870. 7.22. 同地)

ヨハン1世の次男。技師を志すが、病に倒れた兄の代役を務めたことから、母の意向もあり26歳で音楽に転向。兄も「自分は遠く及ばない」と認めるほどの優れた作曲能力を発揮したが、激務が祟り母の後を追うように42歳で没。代表作にワルツ「天体の音楽」、ポルカ=マズルカ「とんぼ」、「鍛冶屋のポルカ」など。

■エドゥアルト・シュトラウス (1835. 3.15. ウィーン~1916.12.28. 同地)

父の顔をほぼ知らずに育ち、長兄の勧めで音楽の道へ。指揮者として活躍したが、作曲の才能は2人の兄ほどではなく、三兄弟の中では目立たない存在だった。長兄の死の翌年に引退、すべての譜面や資料を焼却処分した。

【ウィンナ・オペレッタの時代】

オペレッタ(喜歌劇)の原型は1850年代にドイツ出身の**ジャック・オッフエンバック**(1819-1880)によってパリで生み出され(「地獄のオルフェ(天国と地獄)」など)、実演に接した**フランツ・フォン・スッペ**(1819-1895)がウィーンに移植し定着した(「軽騎兵」「ボッカチオ」など)。1865年にオッフエンバックがウィーンに招かれ、スッペとの「オペレッタ競作」、そしてヨハン・シュトラウス2世との「ワルツ競作」が繰り広げられた。このと

きウィーンの“ワルツ王”の天性のメロディーメーカーぶりを目の当たりにしたオッフェンバックは、「君もオペレッタを書くべきだ」とシュトラウスに強く勧めたという。

母と弟ヨーゼフが相次いで世を去った 1870 年、ワルツの量産から一線を引いてオペレッタに注力。数年にわたる挑戦の後、「こうもり」(1874)をわずか 6 週間で作曲。社会の変化に動揺するウィーン市民たちの心を捉えて空前の大ヒット、マーラーの熱烈な働きかけにより、オペレッタとしては初めてウィーン宮廷歌劇場のレパートリーに加えられた。シュトラウスはその後「女王のレースのハンカチーフ」「ヴェネツィアの一夜」「ジプシー男爵」などのオペレッタを発表したが、「こうもり」ほどの評価は得られていない。

【銀の時代】

■**フランツ・レハール** (1870.4.30. コマーロム～1948.10.24. バート・イシュル)

軍楽隊長を経てオペレッタ作曲家としてデビュー。「**メリー・ウィドウ**」(1905)で一躍スターダムに上り詰め、ウィンナ・オペレッタの第 2 黄金期「銀の時代」を代表する存在となる。その後「フリーデリケ」「パガニーニ」「微笑みの国」など、シリアスな展開・悲劇的結末といった新機軸を打ち出すも次々にヒット。ウィーン国立歌劇場で初演された「ジュディッタ」(1934)を最後に引退し、「銀の時代」も終わる。この頃からナチスと接近、妻がユダヤ人であったにも関わらず迫害を免れたが、第 2 次大戦後は協力者として糾弾された。

次回予告

クラシック音楽講座 最終回

『日本の作曲家たち／クラシック音楽の現在と未来』

2025 年 2 月 2 日（日）14 時～ 所沢市小手指公民館分館

おたのしみに！